



生きつづける いのち

●ぶん●
なかがわあきら

●え●
ひじ みえ



ご主人ごしゅじんが ぼくに いう。
 こころの おくを、
 ほりおこしながら。
 野良のらだった ぼくは、
 ちよこんと すわって、
 ご主人の かおを 見みあげている。

この ボタンの木きを、
 ここに うえて くれたのは、

村むらの マサエばあちゃん。
 もう ばあちゃんは いないけど、
 にわの 石いしどうろうの そばで、
 ボタンは ピンクの 大きな花はなを、
 咲さかせつづけて いる。

この メダカを、
 もってきて くれたのは、
 村むらの 利作りさくじいちゃん。
 もう じいちゃんは いないけど、
 大きな 睡蓮すいれんばちの なかで、
 メダカは、
 いのちを つたえつづけて いる。





いのちは 思い出と ともに、
 こころの なかに、
 生き つづける。
 ずっと ずっと。

みんな だれでも、
 思い出が あり、
 思い出の なかに、
 あの人も あの人も、
 ずっと 生き つづける。
 ポタンの花と ばあちゃん、
 メダカと じいちゃん、
 ぼくと 女の子も そうだ。



そして 野良だった ぼくが、
 いま ここに いるのは、
 あのと き、
 まよいこんだ村で であった、
 一人の 女の子。
 「さあ おたへ……」
 ごはんと 水が、
 ぼくの 目のまえに あった。
 もう 会うことは ないけれど、
 女の子の、
 あたたかかな やさしいこえが、
 ぼくの こころの なかに、
 生き つづけて いる。